

「行ってくるわね、琥珀」

可憐な笑顔で、マイハニー・正美が言った。

普通の犬ならここで『置いてけぼりは嫌』とばかりに騒ぎ立て、駄々をこねるのだろうが、オレは違う。

誰よりもスマートかつ気高くあってこそ、彼女に相応しい一流の男なのだ。

「ああ。気をつけて行っておいで、正美」

低音で囁いた。そして、ハニーの頬にそっとキスを贈る。すると、華奢な両腕がオレの首筋に優しく回された。

「あなたを置いていくのは本当は寂しいわ。素敵なあなたと一緒にパリの街並みを歩きたい。でも、お兄ちゃんをひとりにはできないから。わたしが帰ってくるまで、お留守番をお願いしたいの」

「わかっているよ。あとのことはオレに任せて。きみのためなら、それくらい、なんでもないさ」

大丈夫と、細い首筋に頬ずりして宥める。

「琥珀、ありがとう。大好きよ」

「オレもだよ」

愛しげな眼差しでオレにキスしたあと、彼女は片手を振って家を出た。せつない見送りをすませたオレは居間へ戻り、ソファへ乗った。先にいた慶士を鼻先で押しつける。

「ちょっと。おい、琥珀！」

「なんやねん。文句でもあんのか」

「……もうっ」

ひと睨みで勝負はついた。すごすごと隅に移った慶士は、いわばオレの下僕やな。あ。そうそう。言い忘れてたわ。

オレ、めっちゃ洗練された美犬でハニーと話すときは標準語やねんけど、実は大阪出身で、生まれてすぐ、東京のブリーダーのところに連れてこられてん。けど、そのブリーダーのおっちゃんも大阪人やってん。で、普段はこのとおりの関西弁ちゅうわけ。

標準語しか話せへんように見えるのに意外で素敵とか、近所のガールフレンドらからはよう言われるわ。なんや、ギャップ萌えとかいうらしいな？ まあなんにせよ、そこらの女子は眼中にないねん。

オレの女は正美だけや。せやから、彼女に対してだけは常に紳士的に振る舞っとる。標準語かて、ハニー以外にはよう使わん。

格下の慶士相手はなおさらやな。ハニーの兄貴いうたかて、関係ないわ。それにしても、

この慶士はほんまいきかん男やで。散歩も、オレから言わな行かんしな。まったく…。  
おお。ちょうどいいわ。こいつの脚、枕にしたろ。て、こら。頭は撫でんでええから、肩揉めや。上向き加減の体勢で普段おるせいか、オレら、けっこう凝ってんねん。

「あいつは、おれのことなんだと思ってるんだ」

おい。下僕の分際で、マイルスイートをあいつ呼ばわりとは、ええ度胸しとるなあ。いっちょ、軽くしばいたろかと目を眇めた瞬間、インターフォンが鳴りよった。命拾いしたのうと思いつつ、オレは顔をあげた。

慶士と留守を守るんは、愛するハニーとの約束や。果たさんとな。ソファを下りて、玄関へ向かう。そのオレの横を、慶士が走った。

訪ねてきたのが妙な輩なら、容赦なく追い払ったるわ。慶士はぼさ~っとしとるから、すぐつけこまれんねん。こいつを連れて散歩に行くときかて、もう数えきれんくらい助けてきたわ。ほんま、手のかかる奴やで。

「那智くん、どうしたの？」

ああ、なんや。那智か。今日もシュツとしてるなあ。あんたやったら、問題ない。ハニーの許可が出とる。

「海老原に、留守中の慶士さんを頼まれた」

「え」

「二週間、世話になるんでよろしく」

「へ！？」

嗚呼、マイハニー。オレの負担をちょっとでも減らそうとして那智を呼んでくれたんやな。なんて気遣いや。オレだけの女神。

「手紙も入ってる。『那智先輩、兄をよろしくお願いします。ちなみに、このマンションは防音です♥』か。なるほど」

なんやら手にして那智が言うた。途端、慶士が逃げかけたがあっさり捕まる。そのまま、居間に戻るふたりのあとをオレもついていった。ソファを取られておもしろなかったけど、しゃあない。慶士の面倒をみてくれるんやし、今日のところは那智に譲ったろ。かわりに、テレビの前のラグの上に寝転ぶ。

「ななな那智くん、なにするんだよっ」

「俺たちの初記念本を朗読？」

「うぎゃあ！」

やいやい騒ぎなやと鼻を鳴らしたら、今度は違う声音が聞こえてきた。

「やだ……那智く…っ」

「ココ、硬くしてるくせに？」

「ひうん」

ソファの上で向かいあってひっついて、慶士と那智がキスしだした。

「んんっ」

嫌がるわりに、慶士も気持ちよさそうやから呆れる。そう言っとる間に、あ～あ。慶士の奴、ズボンとパンツ、脱がされてるわ。

「な、那智くん、まさかここで!？」

「海老原の原作に従おうかと」

「…正気ですか。ていうか、元はおれたち!」

「どっちでもいいが」

「よくな……んむっ」

う～わ。始まってもうた。正直、このふたりがイタすところ見んのは、オレ、初めてとちゃうねん。

慶士を連れて散歩に行ったとき、那智の部屋に寄ったら、たまにあるわ。そら、最初はオレかてびっくりしたで？ さすがに、人間の発情シーンは初見やったしな。

一瞬、那智が慶士に乱暴すんのかと思ったわ。ハニーから『那智先輩はお兄ちゃんの婚約者だから』って聞いてなかったら、確実に嘔みついとったな。

「あ……っああ、ん…や」

ほうら。慶士があんあん言うてるし。ほんま、ようやるわ。ていうか、この那智も大概やで。そもそも、慶士のどこがええねん。

普通、あんだけオトコマエやったら、相手はよりどりみどりの選び放題やろ。ルックスだけやなくて、性格もわりとええしな。たぶん絶対、おっそろしくモテるはずやねん。いわゆる入れ食い状態や。

そう。オレと一緒にやな。それが、なんでよりによって慶士なんや。趣味が悪いにもほどがあるで。

まあ、一応ハニーの兄貴やし、慶士も見た目はそこそこイケてる。つつき回して可愛がる分にはわからんでもないわ。オレも、下僕をからかうんは日課やしな。

けどな、こいつら男同士やで。ありえへんやろ。男同士でサカるやなんて、オレの仲間内ではないなあ。

「ひゃう」

「く。毎度、よく締まる」

「ふ、あ……んんんっ」

あ。繋がったわ。那智が慶士を雄のシンボルで深々と貫いとる。なんちゅうか、もの好きな男としか言いようがないな。

「や…ん、あ、あ、あっ」

悦んで身悶える慶士も、オレにはわからん。

生まれて、もうすぐ二年。オレもまだまだ修行が足りんのか。

人間のハニーを愛する身としては、もっと人への理解を深めなあかんねんけどな。ハニーとの愛を成就するためやったら、どんな苦労も厭わんと決めてるし。

「っは……あ、あ…」

不意に、肉の擦れる音がやんだ。慶士の嬌声につづき、那智も低く呻く。終わったなと思った矢先、オレは唐突にひらめいた。

そうや。もしかして、あれか。

オレとハニーに犬と人間という壁があると同じ理論や。那智と慶士も、男同士という壁があるからこそ、惹かれあってるんとちゃうやろか。

ほら。やっぱ、愛って障害があるほど燃えるって言うやん？ そらもう激しく。それやったら、オレも痛いほどわかるわ。

なるほど。もの好きやら変態やら言うて、悪かったな。今後は応援したろとふたりを見遣れば、なんか揉めとる。

「こんなとこでするなんて」

「原作どおりだろ」

「だからって！ ま、待てよ。うわ。この本のつづきが出たらどうしよう…」

「だって、海老原だしな。出すんじゃないのか？」

「はう」

「海老原にその気がなくても、読者の反応次第では、出版社側が続編を依頼するだろうし」

「もし出たら、那智くん、また本と同じことしそうでやだ」

あ～あ。慶士が墓穴掘りよった。あんなこと言うたら『して♥』って催促しとるようなもんやないか。ほんまにあいつはアホやわ。

「ああ。するね」

「…確定って」

ほらな。そんなくらい、賢い那智がわからんはずがないやろ。

「おれは嫌なんだけど」

「あいにく、俺は楽しい。慶士さんも、気持ちよさそうだったよな？」

「うう」

「まあ、提案型セックスってことで」

「て!？」

「斬新だろ。新鮮だし、マンネリ化も防げていいんじゃないか」

「……やっぱり、この人、鬼だ」

甘々もええ加減にしいや。胸焼けするわ。はあ。頼むからマイハニー。早う帰ってきて。  
オレもハニーといちゃいちゃしたいねん♥

